

北海道胆振東部地震厚真町追悼式 式辞 【令和7年9月6日】

ご遺族の皆様並びにご来賓の皆様、本日は令和7年北海道胆振東部地震厚真町追悼式にご臨席いただき、誠にありがとうございます。町民を代表して、謹んで式辞を申し上げます。

平成30年9月6日未明、北海道で初めて震度7を観測した胆振東部地震から、本日で7年が経過しました。この震災で犠牲となられた37名の方々に、心から哀悼の意を表します。最愛のご家族やご親族、ご友人を失われた皆様の胸中を思うと、いまなお尽きることのない悲しみがこみあげてまいります。

震災直後から捜索活動や復旧業務に尽力された関係機関、全国から駆け付けた多くのボランティア、専門家、そして温かなご支援をお寄せくださった全国の皆様に、心から感謝申し上げます。私たちは「震災に埋もれた悲しいまち」で終わらせない覚悟をもって、復旧・復興の歩みを一歩ずつ進めてまいりました。多額の国費が投入され、砂防やかんがい排水事業が竣工し、急傾斜地対策も完了しています。生活空間と生産基盤の安全も確保され、森林再生も着実に進んでいます。宅地耐震化推進事業では、令和9年度完了を目指して事業を進めています。集落の孤立化を防止するための厚真川左岸線の複線化や、ハビウ川の減災対策も講じています。森林再生は令和8年度までを集中期間とし、被害木整理・植林の拡大、路網整備を加速させ、関係機関と連携して自然資本の回復と景観の再生に取り組んでいます。

私たちは復旧と並行して未来への備えを進めています。日本海溝・千島海溝周辺の巨大地震を見据え、「厚真町日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進計画」「津波避難対策緊急事業計画」「津波防災地域づくり推進計画」を策定し、浜厚真地区の津波緊急避難施設の着工、第2期地区の避難路設計や多目的避難施設整備、浸水深に応じたハイリスク地区における個別避難対策など、命を守るための対策を進めています。

復興の先に描く未来像も、着実に形になりつつあります。エネルギー地産地消事業による公共施設への再生可能エネルギー供給、施設間のノンファーム連携の実装準備やZEH仕様の子育て支援住宅、ゼロ・カーボン・ビレッジの形成など、住まいのGX推進、公共施設の再編整備に伴うZEB化など、カーボン・ニュートラル政策を官・民・学で進め、災害に強く環境に優しいまちづくりを進めています。エネルギーを自ら賄い災害時も機能するライフラインは、被災地だからこそその夢であり、まちづくりにおける未来への投資とも考えています。

自然災害が多発する日本では、1月の能登半島地震、阪神・淡路大震災、3月の東日本大震災、4月の熊本地震、9月の北海道胆振東部地震、10月の新潟県中越地震などが繰り返し報道されてきました。共感を広げるという趣旨からか、

防災というハード面よりも悲しみや復興を果たす人間ドラマが演出され語り継がれてきました。教訓から得られる防災行政の進歩や課題など、国土強靱化や減災につながる取り組みが注目されることは、残念ながら十分ではないと感じています。平穏な生活空間に潜むリスクの見える化を図りながら、時代や歴史から学び、減災の知識と備えを当たり前のこととして日常に広がっていくことこそが、復旧から復興を目指している私たちのもう一つの願いでもあります。プレートテクトニクス理論からは薄皮のような地殻は絶えず運動しており、自然災害は地球のエネルギーを由来とするものである以上、人知を超えて繰り返されることを私たちは覚悟しなければなりません。

改めて、発災の日の出来事に想いを馳せると、夢であってほしいと願った日々や犠牲になられた方々とは時間が止まったままであることに気づかされます。これからも、それらの想いに正直でいたいと思います。私たちはその後の歩みを大切にしながら、これからも最善を尽くしてまいります。在天の光となった皆様には、いまの厚真の歩みはどのように映っていますか。「易きに流されるな、誠実に生きろ。あつま愛と助かった命を大切に。」皆様の声に背中を押されながら、私たちは、「強靱でしなやかなまち」「挑戦を諦めないまち」を掲げ、「誰一人として取り残さない」を合言葉に、未来創生と持続的発展の道を着実に歩んでいます。折しも本年は、令和8年度以降を見据える第5次厚真町総合計画を策定しているところでもあります。100年先も安心して暮らし続けられる厚真町の実現に向け、町民の皆様と将来像を共有し、一丸となって歩みを進めることをお約束します。

結びに、犠牲となられた37名の御霊が永遠に安らかならんことを心よりお祈り申し上げます。また、ご遺族の皆様のご平安とご健勝、そして本町に関わるすべての皆様のご多幸をお祈りし、式辞といたします。

令和7年9月6日

厚真町長 宮坂尚市朗